

「野蛮なやつら／SAVAGES」 ★★★

2013（平成25）年1月23日鑑

賞＜東宝東和試写室＞

監督：オリバー・ストーン

原作：ドン・ウィンズロウ『野蛮なやつら』（角川文庫刊）

オフィーリア（ベンとチョンの恋人）／ブレイク・ライプリー

チョン（ベンの親友、元傭兵）／テイラー・キッチュ

ベン（植物学者、平和主義者）／アーロン・テイラー・ジョンソン

ラド（エレナの部下）／ベニチオ・デル・トロ

デニス・ケイン（麻薬取締局の悪徳捜査官）／ジョン・トラボルタ

エレナ（巨大麻薬組織バハ・カルテルの冷血な女ボス）／サルマ・ハエック

アレックス（エレナの弁護士）／デミアン・ピッチル

スピン（チョンとベンの金庫番）／エミール・ハーシュ

マグダ（エレナの娘）／サンドラ・エチェベリア

2012年・アメリカ映画・129分

配給／東宝東和

＜アメリカでは、こんなベンチャー起業も大成功！＞

日本ではホリエモンこと堀江貴文のベンチャー起業は挫折してしまいましたが、アメリカではアップルやフェイスブックなど成功者が続々と登場！本作の原作は、ドン・ウィンズロウが2010年に発表した『野蛮なやつら』で、ステイブ・キングからは「セミオート版『明日に向かって撃て！』だ！」と激賞されたベストセラー小説らしい。本作の2人の対照的な主人公チョン（テイラー・キッチュ）とベン（アーロン・テイラー・ジョンソン）は大麻栽培のベンチャー事業で大成功を収めた若き富豪という設定だから恐れている。

このベンチャー事業の「成長性」に目をつけたのが女帝エレナ（サルマ・ハエック）率いるメキシコの巨大麻薬組織バハ・カルテル。バハ・カルテルがチョンとベンのベンチャー事業との「業務提携」（乗っ取り？）を目指したのは、チョンとベンのベンチャー事業はチョンが戦地アフガニスタンから持ち帰った最高級の大麻の種をベンが育て、最高級の品質に仕上がっているためだ。もちろん、規模的には圧倒的にバハ・カルテルのほうが大きい、質的には圧倒的にチョンとベンのベンチャー事業が販売する大麻のほうが勝っているらしい。日本では大麻栽培で起業することなど到底不可能だが、まさにアメリカではベンチャー起業については、「なんでもアリ！」。

＜男2人は親友！そして何と恋人も共有！＞

「日本維新の会」は去る1月19日、橋下徹大阪市長を「代表代行」から「共同代表」に変更し、親子ほど年の離れた石原慎太郎元東京都知事との「二枚看板」としたが、「共同代表制」がうまく機能するかどうかは微妙。しかし、本作に見るチョンとベンの「共同代表制」は、世界の戦場を渡り歩いてきた元傭兵のチョンと、心優しい平和主義の植物学者であるベンという正反対のキャラでうまく機能しているようだ。しかも、2人は「金もうけだけが目的ではない」という理念のもとに、アフリカとアジアに慈善団体を設立し、「世界救済！」の目標に向かって突き進んでいるというから、「若い富豪」としては立派なものだ。

本作の設定でビックリするのは、そんな大の親友2人が、本作のナレーション役にもなっている共通の恋人O（オー）ことオフィーリア（ブレイク・ライプリー）と3人で仲良く暮らしているうえ、セックス面においてもオフィーリアを共有していること。『野蛮なやつら／SAVAGES』というタイトルの本作が、そのサベージ性を最初に見せるのは、映画冒頭でのチョンとオフィーリアの激しいセックスシーン。たまたま、これはベンが留守中だからOK？そう思っていると、カリフォルニア州オレンジ郡の高級リゾート地であるラグーナ・ビーチにある巨大なお屋敷に3人がそろった後も、オフィーリアはしっかりベンのセックスに精を出していたから、この男2人女1人の生活は理想郷・・・？

＜イケメンもいいが、2人の「おじさん」にも注目！＞

エレナからの業務提携の申し出（？）に対して身の危険を感じたベンが、チョンを説得して事業を丸ごとバハ・カルテルに渡し、自分たちは国外に脱出すると決めたのはさすがに機を見るに敏。ところが、それに納得しないエレナはオフィーリアを誘拐するという強硬手段に訴えてでも、チョンとベンに仲間として仕事をさせようとしたから大変。そんな事態に追い込まればエレナの言うとおりに一仕事しなければならぬのは当然だが、その仕事を完遂すると今度はオフィーリアの人質期間を1年から3年に一方的に延長すると告げられたから、これにはチョンがブツツン。そして、遂に2人はエレナとバハ・カルテルへの反撃を決定。ここからのストーリーが本作のメインとなる。

そんな展開の中で登場し渋い演技を披露するのが、エレナの部下ラド役のベニチオ・デル・トロと麻薬取締局の悪徳捜査官デニス役のジョン・トラボルタという2人のベテラン俳優。ベニチオ・デル・トロは『チェ 28歳の革命』（08年）（『シネマルーム22』92頁参照）、『チェ 39歳 別れの手紙』（08年）（『シネマルーム22』未掲載）の2部作で、何とも人間的なチェ・ゲバラの役をカッコ良く演じたが、本作では冷酷で残忍しかも狡猾な悪人像を小気味よく演じている。また『サタデー・ナイト・フィーバー』（77年）でカッコ良い青春スターぶりを存分に見せつけたジョン・トラボルタも『フェイス／オフ』（97年）以降は中年の渋い役が定着していたが、本作ではもっとも清廉潔白さが要求されるはずの麻薬取締局の捜査官でありながら、実は「カネのためなら何でもあり！」という悪徳捜査官役をクレム味タップリにこなしている。したがって、本作では2人のイケメンもいいが、2人の「おじさん」にも注目！

＜女2人の存在感はイマイチ・・・？＞

私はOことオフィーリア役のブレイク・ライプリーを『50歳の恋愛白書』（09年）でしか見ていないが、同作では当時43歳の女優ロビン・ライト・ペンが主役で、ブレイク・ライプリーは若き日の主人公を演じたに過ぎないのであまり印象に残っていない（『シネマルーム24』130頁参照）。そんなブレイク・ライプリーが本作前半では2人の恋人を相手にさまざまな体位で激しいセックスシーンを熱演するが、オフィーリアがエレナに誘拐されてからはその存在感が薄くなっていく。映画冒頭にみる捕虜に対する不気味な「サベージぶり」を見ると、冷酷な女ボスのエレナに拉致監禁されてしまったオフィーリアの運命や如何に？恋人のチョンやベンならずともそう心配するのが当然だが、本作の展開をみる限り、エレナの人質への待遇は悪くない。しかし、そうすると逆にオフィーリアの存在感は？また死んだと思われていたエレナの娘マグダ（サンドラ・エチェベリア）が実は生きていくという情報が明らかになり、その「弱み」がストーリー展開に「効いてくる」につれて、エレナとオフィーリアの間に母娘のような感情が生まれてくると、さらにオフィーリアの存在感が薄くなっていく。

他方、エレナの方も女ボスとしていつもカッコ良く着飾りながら冷酷な命令を出すというスタイルはそれでいいのだが、カッコをつけるばかりで作戦や命令の中身が薄いとすると、この女ボスは少しバカ？中盤から後半にかけてはそう思わざるをえない展開になるので、『SAVAGES』というタイトルの中でエレナの存在感も次第に希薄になっていく。このように、本作においては女2人の存在感はイマイチ・・・？

＜2通りの結末は邪道では・・・＞

私は新米弁護士の頃、ボス弁からいつも書面の下書きを命じられていたが、大雑把なボスの場合は書面を提出しさえすればだいたいOK。しかし、細かくチェックするボスの場合は、簡単すぎると「もっと詳しく書け」と言われ、詳しく書くと「もっと簡単に書け」と言われることがよくあった。そこで私が考えたのは、予め「簡潔バージョン」と「詳細バージョン」の2種類を準備し、まずは一方を提出。そこで前述のように言われると、おもむろに他方を出すという方法だ。これによってボスをギャフンと言わせると、この上ない快感だった。

本作後半は『SAVAGES』というタイトルどおり、エレナの娘マグダを誘拐することによって「人質交換」を目指すというベンの戦略に沿った作戦が着々と進んでいく。そんな展開の中で迎えるラストのクライマックスが「人質交換」だが、実は現実にはこの実行は難しい。つまり、双方とも銃を構えた状態で、どちらが先に人質解放の約束を履行するかは相当神経を使うわけだ。さらに、指定された人質交換の場所に集まる人数は当然制限されているが、その周辺にはコトの成り行きを注目し、場合によってはそこに介入しようとする勢力（一派）もいるはず。最初はエレナの威光に黙々と従っていたラドも中盤以降はどことなくきな臭い動きを見せていたから、ラストにはどんな行動を？また、デニスも一方ではチョンとベンから情報の提供を迫られてそれに従ったが、他方ではラドからさまざまな圧力を受けていたから、さてこの場面ではどんな行動を？

こんなクライマックスの結末においてAプランとBプランの2通りを準備しておき、観客の好みに応じてそのどちらかを示すことができれば前述の私のケースのように便利だが、しょせん人生は1回こっきり。したがって、本作ラストに見る2通りの結末は邪道なのは・・・。

2013（平

成25）年1月30日記